

新ドイツ零年 (1991)

ALLEMAGNE 90 NEUF ZERO
GERMANY YEAR 90 NINE ZERO

メディア 映画

ジャンル ドラマ ロマンズ

製作国 フランス

色彩 Color

時間 62分

初公開日 1993/12/25

公開情報 広瀬プロダクション

【解説】

あまりに引用される事物—映画（題を採ったロッセリーニの「ドイツ零年」やムルナウの「最後の人」、バルネット「青い青い海」など）だけならまだいいが、リルケやゲーテやカフカの作品の一節、ヘーゲルの『哲学論』、デューラーの絵画、芸術家の記念館や銅像まで登場する—が豊富すぎて、もちろん、それにばかりに惑わされるべきではないのだが、すっかり術中にハマられてしまった。“難しい”と思うととことんダメになるのだ、ゴダールなんて代物は。けれど、彼自身“この映画の台本は歴史”と言っている、西洋史に関し、せめて近現代に限ってでも、欧州人に近い感覚が持てれば、その引用の示す精神的背景を、宣伝チラシの解説の字面以上には理解できるだろう。それを備えられれば、この映画はたたやすく向こうから近づいてくれると感じる。少なくともこの作品に関してはいつものゴダール作品のように、ただ感覚的にその映像を楽しむわけにはいくまい。やはり作者の言うように“歴史は単純で追いやすいものなので”この映画の“カメラの動きは”いたって“緩慢”だ。B級ノワールの設定を借り、再び「アルファヴィル」の密偵レミー・コーション（E・コンスタンティーヌ）の登場する作品であっても、彼は西洋のように老いており、ベルリンの壁崩壊後、東独から西側へ舞い戻ろうというその歩みも、壁の40年の重みにはね返され、ドキュメンタリーとして挿入される、東西ドイツ対立・ナチスのユダヤ人虐殺・ロシア革命・ウーファ撮影所の世界に冠たるドイツの映画などの考察と共に、旧東独内をうろつくのに終始する。そこには“歴史の孤独”が確かに見られ、思わず絶望に囚われてしまいそうにもなるが、そうならないために、この映画から学ぶことはたくさんあるはずだ—とだけは確かに言えよう。

【クレジット】

監督 ジャン＝リュック・ゴダール Jean-Luc Godard

脚本 ジャン＝リュック・ゴダール Jean-Luc Godard

撮影 クリストフ・ポロック Christophe Pollock

アンドレアス・エルバン

ステファン・ベンダ

出演 エディ・コンスタンティーヌ Eddie Constantine

ハンス・ツィッシュラー Hanns Zischler